

# オンライン授業における「特別活動論」の取り組み

— 受講生の自由記述に基づく検討 —

村 越 純 子

## 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大にともない、今年度前期の授業は本学においても対面方式からオンライン方式に変更された。オンライン方式のもとで実施される授業（以下、オンライン授業と略す）には、受講生が時間割の曜日、時限に制約されることなく、ウェブサイトになされた資料を読んだり、録画をみたりするオンデマンド型の授業と、アプリケーションとして、Zoom、Google MeetやMicrosoft Teams（以下、Teamsと略す）などを用いて対面授業同様、設定された曜日、時限に、時間割どおりおこなわれるリアルタイム型のライブ授業（以下、ライブ授業と呼称）がある。これらのオンライン授業の教授法については本学においても様々なかたちで検討がなされてきた。<sup>(1)</sup>

教職課程科目の1つである「特別活動論」は、筆者が担当する前期開講科目である。オンライン方式への変更にとともに、筆者はライブ授業を選択した。本稿は、ライブ授業として実施された「特別活動論」を振り返ることによって、今後のオンライン授業の教授法改善に貢献することを目的として用意された。

以下では、まず「特別活動論」の概要を説明する。具体的には当該科目の位置づけと受講生の性格、教科書および授業計画についての説明である。次に、オンライン授業のための準備として教員側の通信環境の整備、オンライン方式ゆえに想定される課題とそのための取り組みについて述べる。さらに、授業後に実施された自由記述による

アンケートに基づいて、想定された課題への取り組みが成功したか検討する。最後に、オンライン授業における有効な教授法を実現する環境づくりの重要性を指摘する。

## 2. 「特別活動論」の概要

### 2.1 科目の位置づけと受講生について

本学の教職課程科目は1年次から体系的な履修が可能である。とくに理学部数学科対象の教職科目については2年次前期に「教育課程論（総合的な学習の時間の内容を含む）」、2年次後期に「生徒指導」そして3年次前期に「特別活動論」を履修できるようにカリキュラムが構成されている。筆者が担当した2020年度前期に開講された「特別活動論」の履修登録者22人は紀尾井町キャンパスの理学部数学科所属の学生である。すでにかれらは筆者が担当した2019年度前期の「教育課程論」、同年度後期の「生徒指導」を履修済みである。そのため前年度から授業担当者と受講生との間には一定の信頼関係が形成されていた。この点は、オンライン授業にプラスに働いたと思われる。

### 2.2 教授方法：教科書および授業計画

筆者は、2012年（平成24年）の中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』<sup>(2)</sup>において示されている「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）」（9頁）を

担当授業に取り入れてきた。教職課程科目の1つである本科目では、アクティブ・ラーニングを、授業内で文献を読む、報告準備のためにディスカッションをおこなう、報告原稿を書く、プレゼンテーションをおこなう、などの活動として捉えている。そして、学習過程を、(1) 学習の動機づけとして、「研究テーマ」(表1参照)の選択、(2) 文献検索などによる必要な知識の習得、(3) 報告用読み原稿およびプレゼンテーション用パワーポイント原稿の作成と修正、(4) 画面上の聞き手を前にした報告とその評価、(5) 授業から得たものの確認と今後の活動に活かす導き、という5つの要素からなる過程と考えた。

本年度、前期の授業回数は全13回とされたため、第1回授業のガイダンスに続いて第2回授業では(1) 各自の「研究テーマ」の選択を促した。第3回授業では報告の手本の提示、それ以降、第11回授業までは各自の報告予定日2週間前までに(2) 文献検索などによる必要な知識の習得をめざした。新型コロナウイルス感染症の影響で大学図書館の利用ができなかったことから、国立情報学研究所(NII)が運営する学術データベースCiNii(Citation Information by NII)などの利用をすすめた。そして報告日の1週間前までに(3) 報告の構成を考えて報告用読み原稿およびプレゼンテーション用パワーポイント原稿の作成、修正をさせることとした。そして各自の報告日に(4) オンラインではあるが受講生の前で報告し、評価を受け、第12回授業と第13回授業で(5) 授業から得たものを確認し今後の活動に活かすことを考えさせた。

「特別活動論」の教科書は、昨年度同様、藤田晃之編著『平成29年版中学校新学習指導要領の展開 特別活動編』(明治図書、2017年)である。同書は、前半部分の理論的解説、後半部分の具体的な事例説明から構成されている。前半の理論編部分では特別活動として理解しなければならない

「学級活動」、「生徒会活動」そして「学校行事」の領域に関する17のトピックが2頁ごとにまとめられている。この教科書を採用したのは、学生が自分で内容を学習しやすく、その内容をきっかけにして自分の関心を広げられ、しかも自らの関心による調査が可能だからである。

### 3. オンライン授業のための準備

#### 3.1 教員側の通信環境の整備

「特別活動論」の受講生は毎年3年次に在籍する約20人である。教職課程科目という性格から、教員による一方的な講義ではなく、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、できるだけ受講生自らが考える機会を設けることを目指してきた。また、昨年度までの対面授業ではE-mailを利用して授業時間外においても質問に積極的に対応するなど、受講生の関心に応じた指導を心掛けてきた。

対面授業からライブ授業に変更した際に不安に思ったことは、言語表現以外から受講生の状態を把握することが難しくなるのではないかということである。対面授業では当たり前で把握できる「学生の表情」を、オンラインでは正確に把握できなくなるのではないかということである。この不安を取り除くために、まず比較的画面の大きなモニター(32インチ)を新たに入手した。これまで使用してきたモニターをその横に並べ、2台をデュアル設定で接続し、「学生の表情」を確認しながら、受講生に資料を説明できるようにした。ライブ授業においては受講生と対話をスムーズにおこなうためにカメラやマイクも大切である。性能のよいWEBカメラ、マイク付きヘッドフォンなどを新たに入手して、オンライン環境を整えた。

#### 3.2 想定された課題と取り組み

受講生の報告に対して筆者が想定した課題は以

下の2つである。1つ目は、対面授業で行ってきたアクティブ・ラーニングの手法をオンライン環境のもとで受講生にいかにして受容させるかである。2つ目は、会って話すことのできないオンライン環境のもとで、いかにして受講生同士がコミュニケーションをとり、「主体的・対話的で深い

学び」を体験できるようにするかである。

前者については、まず手順として前節で指摘した学習過程の(1)から(4)を明確に示すことで対応した。具体的には、第1回の授業終了後、Teams内に表1のような報告予定表を作成した。

表1 2020年度「特別活動論」報告予定表

No	名前	報告日	研究テーマ	教科書 4章-節	教科書 (実践)頁	教科書 (理念)頁
1		④6月4日	あなたらしさ・自分らしさ	4	106-109	28-31
2		④6月4日	自己実現としての働く意味	8	122-125	34-35
3		⑤6月11日	学校給食	-	他文献	90-91
4		⑤6月11日	合理的配慮	-	他文献	74-77
5		⑥6月18日	性的な発達への適応	5	110-113	他文献
6		⑥6月18日	応急手当の意義と方法	6	114-117	32-33
7		⑥6月18日	社会で活躍するために必要な力	7	118-121	36-37
8		⑦6月25日	授業を受ける姿勢についての話し合い	9	126-129	62-65
9		⑦6月25日	生徒会の組織づくりと生徒会活動	10	130-133	38-39, 40-41
10		⑦6月25日	生徒会と学校行事	11	134-137	42-43, 48-49
11		⑧7月2日	ボランティア活動などの社会参画	12	138-141	44-45, 46-47
12		⑧7月2日	儀式的行事	13	142-145	50-51, 88-89
13		⑧7月2日	防災種目を取り入れた運動会	15	150-153	54-55
14		⑨7月9日	地域の文化の理解—文化祭	14	146-149	52-53
15		⑨7月9日	地域の文化の理解—地域の祭り	14	146-149	60-61
16		⑨7月9日	地域の文化の理解—福祉施設との交流	14	146-149	86-87
17		⑩7月16日	係活動を充実させよう	2	98-101	18-21
18		⑩7月16日	旅行・集団宿泊的行事	16	154-157	56-57
19		⑩7月16日	部活動の意義と課題	-	他文献	26-27
20		⑪7月23日	職場体験活動	17	158-161	58-59
21		⑪7月23日	いじめの防止対策	-	他文献	70-73
22		⑪7月23日	いじめの防止対策	-	他文献	70-73

\*実際に配布した資料に、授業回を明示するため、報告日の前に番号を加えている。

表1に示した「研究テーマ」の構成は、前述の教科書(『平成29年版中学校新学習指導要領の展開 特別活動編』)の第4章「特別活動の新活動プラン」に掲載された項目に基づいている。そこに筆者が学校でのこれからの「特別活動」のなか

でとくに重要になってくると考える「学校給食」、「部活動の意義と課題」、「合理的配慮」、「いじめの防止対策」の4つを加えた。受講生には、第2回授業までに関心を持った「研究テーマ」欄に自分の名前をTeams上で記入させた。この計画表

に基づいて受講生が各自の選択したテーマについて報告することになる。

第2回授業では各自の「研究テーマ」選択理由の確認や報告手順の詳しい説明を行った。報告時間は20分以上25分以内、質疑応答5分とした。報告する際の聴覚資料となる読み原稿（MS-Word形式）については1分200字で話す速度を想定し、20分程度話すため4000字以上を作文すること、そして視覚資料となるパワーポイント原稿（MS-Power Point形式）については18シートから24シートで作成することを求めた。そのうえで、受講生に報告予定の読み原稿とパワーポイント原稿を報告日の1週間前までに完成させ、本科目担当者（筆者）に送信させることとした。受講生から送信されてきた原稿に筆者が目を通し、報告内容の完成度などを考慮し、必要に応じて関連の文献やJ-STAGEなどの電子ジャーナルプラットフォームを紹介し、場合によっては読み原稿の添削をすることとした。

第3回授業では報告の手本を示すために昨年度の本科目受講生2名に、授業時に報告した資料に基づいてプレゼンテーションを依頼した。かれらは受講生のなかでとくに優れた報告をおこなった2人である<sup>(3)</sup>。プレゼンテーションの「手本」を示してもらうことで、1人25分の持ち時間のなかで十分な報告ができることを理解させ、また報告内容に対してコメントさせるなどして、自らの報告やその報告に対する反応をイメージできるように配慮した。

特別活動の本質を理解させるうえで、「個」としての学びの楽しさだけでなく、「集団活動」とおして共に学ぶことの楽しさを実感することが大切であると考え。そこで、オンライン環境という制約があるなか、受講生同士がコミュニケーションをとり、「主体的・対話的で深い学び」を体験させるために、報告資料の共有や発表準備の過程の「見える化」に取り組んだ。具体的に

は、筆者が報告水準に到達したと判断したパワーポイント原稿を順次PDFに変換してTeamsに作った「学生の報告資料」フォルダにアップロードして受講生全員に一斉通知した。報告資料は受講生全員で共有できるので、それらを参考に自らの報告準備ができるようにした。そして、発表当日の報告は1人でおこなうが、報告までの準備においては学生間で協力して学習してよいこととし、さらに学生相互でTeamsを用いた「発表の練習」をすすめた。

#### 4. 自由記述にみる学習成果

前期（全13回授業）終了後、オンライン授業による学習成果を把握するために、受講生22人に授業を受けた感想（アンケート）を自由記述形式で依頼した。匿名性を担保するために、回答結果についてはインターネットツールを使用して回収した。ここでの考察は、回答した者14人分の自由記述に基づいている。個人が特定されうる情報については削除している。なお、文章の掲載については回答者から了承を得ている。自由記述内容は本稿の最後に「付録」として掲載されている。以下で示す①などの番号は「付録」に付した番号である。

第3節で設定された課題を改めて示せば、1つ目は、対面授業で行ってきたアクティブ・ラーニングの手法をオンライン環境のもとで受講生にいかにして受容させるかであり、2つ目は、会って話すことのできないオンライン環境のもとで、いかにして受講生同士がコミュニケーションをとり、「主体的・対話的で深い学び」を体験できるようにするかである。

以下では、これら2つの課題を解決する取り組みが成功したかについて、受講生による自由記述から検討する。



#### 4.1 第1の課題について

第1の課題については以下のとおりである。授業当初にはオンラインで受講生自身が調査したことを発表すること、自分一人で報告すること、また報告しているときに聴講者の表情がわからないこと、などに「不安」や「心配」をいただいていた(②, ③, ⑤, ⑥)。

このようなオンライン授業で学生主体のアクティブ・ラーニングを実施することに対する学生の困惑を解消するためには、教員が受講生の文献に関する質問や相談にメールやTeamsのチャット機能を用いて丁寧に対応すること(②, ⑥)、教員から文章の添削などの個別指導があること(⑪)、報告後すぐに聴講した他の受講生からの評価がもらえる機会をつくること(③)などが有効であったことがわかる。

受講生が作成したパワーポイントファイルをPDFに変換してTeams上にアップロードし、そのことを受講生全員に対して一斉通知することによって報告資料の共有や発表準備の過程を「見える化」した。このことによって、受講生の報告準備が早くなっただけでなく、より積極的に準備に取りかかるようになった。受講生の多くが、パワーポイント原稿を作成したこと、それらを用いて報告したことに達成感を感じたと述べている(②, ③, ④, ⑤, ⑦, ⑨, ⑩)。

オンライン授業ですべての受講生が報告できるようにするためには、次のような配慮が必要である。「通信障害などによるトラブルもあり、対面でのプレゼンが恋しいと感じる点もいくつかあった」(①)とあるように、オンライン授業では、通信障害によるトラブルが発生することがある。実際、第7回授業のある報告中に、音声が全く聞こえない状況が生じた。受講生に責任はないため、設定されていた「予備日」(第12回授業)に改めて報告してもらった。報告日程表の作成においては、「予備日」を設けることなどによって通

信障害が原因となって報告がうまくいかなかった場合に備える配慮が必要である。

#### 4.2 第2の課題について

第2の課題への取り組みが成功したことが、自由記述によって検証された。受講生の多くが準備期間に、Teamsを用いて報告の構成を受講生相互で確認しあい、「発表の練習」を繰り返すことで、プレゼンテーションの質を高めようと努めていたのである。具体的には次のとおりである。

受講生相互でおこなう「発表の練習」によって発表内容の水準を高め、発表方法(表現法)に工夫を凝らしてプレゼンテーションの質を高めていたこと(③, ④, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑫), オンラインで「本番と同様に練習」という体験により、「主体的・対話的で深い学びが自然にできている」こと(③)などが記述されている。そして、共に学んだことによって表現力を高めることができ、それを「自身が成長した点」(⑦)と考えたり、より具体的に「自分が成長した点」として、自分の報告内容や表現力を高められたことだけではなく、「あとに発表を控えていた友達の手助けをすることができたこと」(⑧)を挙げる受講生もいた。また、「発表後のフィードバック」、つまり他の受講生からの批評によって「今後の課題などを見つけることができる」として共に学ぶことの価値を見出す者もいた(③, ⑩)。授業回数を経る過程で、受講生の発表後に設けた他の学生からの批評や、教員の講評を傾聴するなかで、「誰かと協力すること」の大切さに気づき、今後の新たな学び方として受容しようとした受講生もいた(⑪)。さらに、このオンラインによる「特別活動論」の授業の特徴を、「私達自身が主体となって授業を動かすということ」ととらえる受講生がいた(⑭)。

以上のように、受講生は授業当初にはオンラインで、自分一人で報告することに「不安」や「心

配」をいただいても、報告までの準備の過程で受講生が互いに「発表の練習」をすることによって報告内容の構成を検討し、より見やすいパワーポイント原稿を作成するだけでなく、それを用いてわかりやすい説明をするための表現方法を鍛えていた。そしてこのような体験が報告後の達成感につながっていたと考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、筆者が担当した「特別活動論」の授業を対象として、オンライン方式ゆえに想定された課題とそのための取り組みについて検討した。

まず当該科目の位置づけと受講生の性格、教科書および授業計画について説明したうえで、オンライン授業のための準備として教員側の通信環境の整備について述べた。そして、オンライン方式ゆえに想定された2つの課題と、その課題に対する取り組みを説明した。課題の1つは、対面授業でおこなってきたアクティブ・ラーニングの手法をオンライン環境のもとで受講生にいかにして受容させるかである。もう1つは、会って話すことのできないオンライン環境のもとで、いかにして受講生同士がコミュニケーションをとり、「主体的・対話的で深い学び」を体験できるようにするかである。さらに、取り組みの効果（学習成果）を、授業後に実施された自由記述によるアンケートに基づいて検討した。その結果、いくつかの取り組みは学習成果をもたらす有効な方法であることがわかった。なかでもとくに、オンラインで報告資料の共有や発表準備の過程を「見える化」することで、受講生の学習意欲を高めることができた。また、報告までの準備の過程で受講生が互いに「発表の練習」をおこなうという体験が報告後の達成感につながっていたこともわかった。つまり、オンラインであっても「集団活動」とおして「主体的・対話的で深い学び」を体験できる環

境をつくることは可能ということである。

よりよいオンライン授業を実現するうえで一般的に求められる課題は、教員側のよりよい通信環境の整備にあるだろう。筆者は比較的画面の大きなモニター（32インチ）を入手し、既存のモニターと並べて2台をデュアル設定し、さらに性能のよいWEBカメラ、マイク付きヘッドフォンなどを新たに入手するなどして、オンライン授業の環境を整えた。小さなノート型パソコンでは「学生の表情」を瞬時に把握したり、学生との対話をスムーズに行ったりすることはできなかったように思う。

また、対面授業における授業時間外学習支援にかかる時間よりも、オンライン授業におけるそれの方がかなり長くなる。オンライン授業の場合、教員が学生の学習支援を十分にできるだけの時間が制度的に確保されていることが求められている。

### 付録 受講後の感想（自由記述）

- ①全体を通しては、特別活動に関して行事ごとの意義だけでなく、それぞれの繋がりについて知ることができた。具体的には、事前学習で生徒がそれぞれ責任感を持てるよう指導する点、活動を通して異年齢集団との交流を図る点、活動において社会貢献の意義を学ぶ点など、様々な場面で共通していることがわかった。それぞれの課題に関しても、一時的なものではなく、生徒の記憶に残るような指導をしなければならないことなども共通していた。自分が調べたことでは、今まで生徒目線では知ることがなかった特別活動の意義や課題について深く知ることができ、教員としてそれをどのように生徒に伝えるか、伝えたところで伝わるのか、知らないままより良いのではないか、などと考えるきっかけとなった。オンラインの授業だった点に関しては、パワーポイントによるスライドをパソコンで直接見ることができるため、全体を通して見やすかったが、発表者の顔の表示は小さくなってしまい、表情がわかりにくかったことや、通信障害などによるトラブルもあり、対面でのプレゼンが恋しいと感じる点もいくつかあった。周りに人がいないことで、「自分がしっかり聞かなくては」と意識が高まり、対面より集中して聞いているのではないかとも思った。自分が発表しているときは、相手の顔が見えないことでちゃんと伝えることができていないか不安になることもあったが、緊張はあまりしなかったため、その点は良かったと思う。
- ②今回、特別活動論では学生同士が自身のテーマごとの調査したことを発表するという私が今までに受講したことのない授業であった。授業スタイルを初回の授業で聞いたとき、主な授業を学生だけで行なうのは十分な水準にいくのか不安に思っていた。しかし、自身の発表準備を行なっている際、何回も先生とコミュニケーションをとることによって、ある程度水準にまでしっかりと発表の水準を上げることができた。また私は、Xさんの発表に携わることで、他人の意見をうまく取り入れながら発表の水準を上げることの難しさを学ぶ事ができ、今後に役立てることができるようになった。さらに、多人数に自分の身につけた知識を伝えることは教員になった際に必須事項になる。そのため今回の授業で練習することができたのは自身にとって多大なアドバンテージを得る事

ができたと言える。今回は新型コロナウイルス感染症の影響により、対面授業ではなく、オンライン授業形式となってしまった。デメリットは発表の際のリアクションの欠如と先生や学生とのコミュニケーションをとる際のレスポンスの遅さが挙げられる。しかしメリットも挙げられると思う。今日はネット社会であり、情報のやりとりは、紙媒体ではなく情報媒体をネット上で行なう。よって今回の事態は非常事態ではあったがメールのやりとりやレポートのやりとりで、情報のやりとりの練習になった。また、資料の共有がスムーズに行なうことができたのではないかと私は思った。

- ③私は、今回のレポートのような文章を作るのが苦手である。さらに、オンライン授業であったため、他の人に会うことができず、1人でできるかなと不安があった。しかし、オンラインで繋いで本番と同様に練習ができ、グループで活動することでより良いものができることを改めて感じた。自分1人で行うのではなく、誰かを行うことで自分では気づけなかった間違いに気づいてくれるし、違う意見が聞けることで新たに自分の作ったレポートを見直すことができた。私の構成や文章でおかしなところについて、それをどのような順番にすれば良いのか、どのような文章にすれば良いのか意見をくれた。そうすることで、初めのものよりより良いものができたと思う。またそれらの活動を行うことで、特別活動の中にある主体的・対話的で深い学びが自然的にできているなと思った。そして、今回はオンラインなので、他の人の表情が見えず、自分のプレゼンがしっかりできているのか、心配になった。でも、自分の発表が終わったあとに他の人が意見を言うことでどこが良かったのか、どこを直せば良いのかが分かったので、次回に活かしていけるなと思った。

- ④今回の特別活動論で自分の長所の一つに気がつくことができた。20分以上の発表を一から準備して行うというのは、今まで経験したことがなかったが、実際にやってみたら案外どうにかなるんだな、ということがわかったのである。発表にあたって特に意識したのが本番同様に発表の練習を行うというものである。これは一人でするのではなく、友人にみてもらい、批評をしてもらい、その都度発表の完成度を上げていった。多くの練習を繰り返したことにより、本番では満足のいく発表ができた。こ

の経験、今後の人生で必ず役に立つと確信している。コロナ禍による外出自粛やオンライン授業に関しては必ずしも、デメリットではなかったと感じている。先にも書いてある発表の練習は全てオンラインの中で行い、そのおかげで様々な人と、また、多くの回数を重ねることができたのである。また、特別活動論を通して、学校教育における特別活動の重要性が理解できた気がする。特別活動の中でもあまり目立たないような教育内容にも、しっかりと存在価値があることを確認できたことは、非常にためになった。将来、学校の教師になったときに、この授業で学んだことを思い出し、存分に役に立てて行きたいと思った。

- ⑤私は、この特別活動論をやって良かったと思う。理由は2つある。まず1つ目は、発表する機会があったからだ。初めはみんなの前で発表すると聞いたときは、嫌だなと思っていた。みんなの前で何かをすることは、とても緊張してすぐにあがってしまうからだ。今は、あまりみんなの前で発表する機会が少ないことがあるかもしれない。だから、オンライン授業ではあったが、みんなの前で発表することができて個人的には嬉しかった。教師になる、ならないに限らず、社会に出たら確実に必要な力になると思うので、今後も行っていき、回数を重ねて少しずつ慣れていきたいと思う。2つ目は、相手に自分が伝えたいことを、しっかりと伝えることの難しさを知ることができたからである。今回はパワーポイントを使用した。そこで「相手にどう伝えるか、どうしたら見やすいか」など考えた。“文字の大きさ”、“文字の色”などだ。それをもとに、原稿を作った。ここでもパワーポイントをそのまま読むのではなく、補足しながら発表するという今までやってこなかったことだったので、難しかった。パワーポイントを使用して発表する機会は、今後増えていくと思うので、発表する能力もそうであるが、技術面に関しても磨いていきたいと思う。最後に、今回はオンライン授業であり少し不安ではあったが、普段通りの授業ができたと思うので良かった。

- ⑥私は私以外の人のプレゼン練習や、相談などにも多く乗らせてもらった事を嬉しく感じている。オンライン講義が導入されてまもない時、私は対面の時よりも先生や他の仲間と連絡が取りづらくなるのではないかと不安に感じていた。しかし、チャット等で内容に関する相談や、

発表の練習を一緒にして欲しいというコメントを貰ったことから、オンライン上でもコミュニケーションは対面と同じ程度にできると考えられる。教職科目を取っている同級生同士で昨年度からグループで1つのレポートを作るなどを行ってきたため、オンライン講義になる前からある程度関係性が深まっているからこそ、なし得たものではないのかと感じている。

- ⑦私が発表の準備に頑張ったことは、情報収集である。テーマに関する本やサイトを調べ、情報収集するのに一番時間を費やし、頑張った。学んだことは、テーマに関する知識と私の住む地域の文化である。完璧に理解はしているとは言えず、私が教員になった際に活用できるかどうかはわからないが、学ばない時よりかは確実に身になっていると感じている。友人と協力したことで自身が成長した点は、話し方やスピード、間、トーンである。これらは発表するうえでとても大切なことで、友人と発表の練習を行わなければ気づくことができず、成長することとはなかっただろう。

- ⑧私が今回プレゼン発表の際に頑張ったことは、教科書の内容や学習指導要領の内容を理解し、わかりやすく伝えるためのスライドを作ることである。私が今回調べたテーマは、今までに私が経験したことのないものであった。発表の原稿を作る際にも経験談を交えることができず、1から調べて理解するのに時間がかかり、聞き手に見やすいかつ理解しやすいパワーポイントを作ることにも時間がかかった。パワーポイントを一通り作ってみても見にくいスライドや、一番伝えたいものが抜けているスライドがあった。納得のいくパワーポイントを完成させて友達と練習をすると、友達から「こここのスライドがわからない」、「ここが気になった」などたくさんの言葉をもらい最終的なパワーポイントを完成させることができた。私は今回のプレゼン発表の準備で、一人で作業をしていても気づくことはできないが、友達など他の人とともに作業することで気づくことができるものがあるとわかった。そして友達と協力したことで自分が成長した点は、友達にアドバイスをもらい完成させたところで終わるのではなく、私のあとに発表を控えていた友達の手助けをすることができたことだ。自分が意見をもらうだけでなく、自分が友達に意見を話すことでお互いにより良いものを作ることができた。



- ⑨私はプレゼンの準備で、自分が伝えたいことがいかに聞き手に理解してもらえるか、つまり“わかりやすいスライド”という点を意識して作成した。例えば、文中のキーワードの色を変えたり、図やイラストを挿入することで視覚からの情報をわかりやすくすること、そして声の強弱や話すスピードで、重要語句や知ってほしいことを強調するようにした。その際私は、スライド同士の繋がりが発表としての話の軸を確立させることに困難を極めた。その時には友人達と発表の練習を行って意見を貰い、自分なりにまとめ直すという作業を繰り返した。自分では気づかない視点を持っている仲間の意見を聞くことで、芯の通ったスライドを作り上げることができた。
- ⑩今回の授業を受けて、学生自身で調べ、それを独自の工夫で発表する方が、ただ教員が授業を行うよりも確かに理解が深まった気がする。また発表する側は、相手に伝わりやすくするために、自分で調べたものの中でなにが大切なのか、また、なにに一番重きを置くべきなのか、といった工夫もしなければいけなかったため、大変だったが、終わった後に達成感があつた。発表後のフィードバックも自分の良かった点や今後の課題などを見つけることができるため、とてもよく作用していたと思う。調べたことをまとめ、わかりやすく伝えるプレゼン能力、相手がなにを伝えたいかを考え、理解する聞く力、聞いたことを踏まえ、自分の意見をまとめて話す力、こうしたものがこの授業形態で育成されるのではないかと考えた。
- ⑪前もって準備を行った上で何かを発表する授業を今までなかなか受けてこなかったもので、とても新鮮だった。先生に読み原稿の添削をしていただく、母に発表の練習を見てもらった際に話し方について指摘をしてもらうなど、他者からの客観的な意見を取り入れることでプレゼンの精度が自分でも分かるほど上がっていき、誰かと何かを作り上げることの喜びを、身をもって感じる事ができた。また、他者の発表を聞いた際に、友人に手助けしてもらった人が多く見られた。自分は「自分のプレゼンなのだから自分一人で取り組むべき。誰かに助けを求めるなんてもっての外」と友人と協力できずにいたので、助けを呼べることをすごいなと思ったし、すごく羨ましいとも思った。誰かと協力することでより良くなったと講評を受けていたのを聞き、自分も勇気を出して助

けを求めるべきだったと反省している。責任感を持ち一人でやり切ることも大切であるが、良いものづくりのためにできることは惜しまずにする事の重要性を学ぶことができた。

- ⑫発表で使う資料はどこからのものなのかを、スライドに明記するか自分で読むかどちらかは必ずした方が、聞いている側としても確かな情報だなと思ってもらえると思い、準備の段階で特に意識した。また、友人に発表を聞いてもらうことで、スライドと読み原稿の相違点に気づかされたり、話し方の不自然さを直すことができた。発表の前に何度か、スライドが写るかの確認も友人と一緒にしたので、授業ではスムーズに発表を始めることができた。
- ⑬私はこの授業を受けて、良かった点は2つある。1つ目は、多くの知識を知る事ができた事である。学生自身が発表をすることで難しい言葉の説明を入れてくれたり、わかり易く話してくれたり、理解がしやすかった。教員にならなくても応用できる内容ばかりだったので、家族に共有することができた。2つ目は発表をした事である。私自身は2年生の頃にLGBTについて発表をした経験を活かせる場面だと思って臨んだ。全員の前で発表する事と、オンライン上で発表する事は、緊張感や内容の伝え方など、全然違うなと思った。人前で発表する事とオンライン上で発表する事の経験を積むことができたので、社会に出てから役立てることができると思った。
- ⑭1度目の発表前、なんとかなると正直思った。短い準備期間ではあったのだが、自分なりに調べてまとめることができ、その点では良かった。しかし、実際に発表してみると思ったように上手いかわず、皆さんにも迷惑かけてしまった点に関しては、今の自分に不足している箇所が見つけられて良かった。これからもこのような場面が多々あると思うので、今回得たものを生かしつつ、能力向上に努めたいと思う。皆さんの発表を聞いて良い点、改善点どちらも勉強になった。良い点に関しては参考にしていきたいと思うし、改善点に関しては、私自身に置き換えて考えることができた。そして、全てのテーマが何かしらと繋がりを持ち、やはり全体を一貫して見る事が大切であることを再確認できた良い機会になった。皆さんのプレゼンがしっかりポイントを押さえているということが一つ要因としてあげられるのではないかと

う。全体を通して皆さんと共に、教師を目指す一員としてこの授業に参加できたこと、知識面・能力面等において成長できたこと、とても良かったと感じた。先生による講義もちろん大切だが、特別活動論のように私達自身が主体となって授業を動かすということもとても新鮮で、良い影響になった。もちろん裏方として講義全体を支えてくださった先生のおかげだと思う。

#### 〔注〕

（１）大学の新型コロナウイルス感染症対策を示した「新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言」が示された場合における大学等の臨時休業の実施に係る考え方等について（周知）」（２文科高第54号 令和２年４月７日）以前の４月４日に城西大学では教員に前期講義開始日が５月１１日（月）となり遠隔授業の活用方針が示され、同時にTeams上に城西大学・城西短期大学の教員が遠隔授業の情報を共有することができる「Online授業」が作られた。筆者が所属する城西短期大学では2020年４月17日に「城西短期大学令和２年度第１回FD研修会」を開催し、そこで筆者は「Microsoft Teamsを用いたWeb授業の導入までの手順―村越ゼミナールでの事例―」を報告し、そこで用いた資料を学内「Online授業」にアップロードした。

（２）文部科学省「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」<[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)>を参照。

（３）報告者２人のうち、高井勇人さんは新潟大学教職大学院および東京都教員採用試験に合格、青木真美さんは栃木県教員採用試験に合格した。